

氏名	富山晴仁
授与した学位	博士
専攻分野の名称	文学
学位授与番号	博甲第2027号
学位授与の日付	平成12年 3月25日
学位授与の要件	文化科学研究科人間社会文化学専攻 (学位規則第4条第1項該当)
学位論文題目	Null Subjects and Clause Structure (空主語と節構造)
論文審査委員	教授 和田 道夫      教授 下河部 行輝 教授 高橋 輝和      教授 辻 星児 関西外国語大学外国語学部教授 大島 新 広島大学教育学部講師 酒井 弘

### 学位論文内容の要旨

本論文は空主語に関連する様々な言語現象を探究したもので、A4版英文(ダブルスペース)で229頁におよぶ。内容は既発表論文を基本としたものに、新たに書きおこした内容を加えて全体を統一したものである。

#### 第一章 序論

本章では、本論文で扱う現象と、この論文の主たる枠組みとして採用する「原理とパラメータのアプローチ」の基本的仮定と概念の概略を示した。特に、Chomsky(1993, 1995, 1998)のミニマリスト・プログラムで仮定されている句構造や移動に関わる制約などを紹介した。

#### 第二章 空主語とX<sup>0</sup>-EPP

本章ではEPPの観点から空主語を持つ言語を論じた。近年の空主語を持つロマンス語(NSRLs)の研究によって、これらの言語がChomsky(1982)における意味でのEPPに従わないということが明らかになっている。しかしAlexiadou and Anagnostopoulou(1998)はXPの要素ではなく、X<sup>0</sup>の要素でこれらの言語のEPPを満たしているのだと論じている。この主張に従うことで、X<sup>0</sup>-EPPのシステムによってイタリア語の方言(FiorentinoやTrentino)の差がI<sup>0</sup>を中心に見られるという事実が説明できることを示した。

さらにX<sup>0</sup>-EPPのシステムに基づき、XP, X<sup>0</sup>両方の要素によってEPPを満たすことができる言語が存在するとの仮定を行う。この仮定によって、Passo Polesanoの主語位置に見られる興味深い統語的振る舞いを説明し、また、Moriyasu(1999)が分析した現代ヘブライ語にみられる統語現象も説明した。

#### 第三章 空主語言語と相対的X'理論

本章の議論は、Fukui(1986)による相対的X'理論に基づいて行った。相対的X'理論では、指定部

の有無がその言語の統語現象に重要な影響を及ぼすとされる。日本語もドイツ語も主語位置より前に要素をスクランブルすることができるが、日本語だけがスクランブルした要素からの取り出しを許すという事実がある。本章の冒頭で、この両言語の差が相対的X'理論の基本的考えによって説明できることを示した。

また、この相対的X'理論の考えに基づいて、イタリア語ではS (=IP) が境界節点にならないとするRizzi (1978/82) の主張を、閉じた範疇という観点で述べ直した。さらに同様の考えに従って、Chomsky (1998) で提案された移動にかかる要請であるPhase Impenetrability Condition を修正し、最新の理論の枠組みの中でRizzi (1978/82) のデータを説明することも試みた。

本章の最後では、新たに提案した Phase Impenetrability Condition の修正案に従い、日本語とモホーク語の分析を行った。修正した Phase Impenetrability Condition と相対的X'理論の考えによって、日本語では基本的に項の wh句がWh-islandに従わないという事実と、モホーク語では Subject Condition と Wh-island Condition の両方が見られるという事実が説明できるようになることを示した。なお、本分析で問題となる日本語の「～かどうか」節に関しては、CP が二重構造になっていると分析することで解決した。

#### 第四章 ゲルマン語における空主語

本章では、ゲルマン諸語に見られる、音声を持たない虚辞の構文について論じた。Chomsky(1995) でなされた虚辞のproの分布はPFによって決定されるという仮定を発展させ、虚辞のproは形式素性[V]を持った主要部をホストとする拘束形態素であるという主張を行い、さらに、Distributed Morphologyの枠組みを採用して、可視的な虚辞は形態論部門で選択されると分析した。これにより、ある環境では義務的に可視的な虚辞が選択されるという事実が、異なる派生を比較することなく正しく予測できるようになることを示した。

#### 第五章 結論

主語を持つ言語と持たない言語をEPPの観点から分析することは有効であり、特に指定部の有無が統語現象に重要な影響を及ぼすとする相対的X'理論の考えを採用することで、両言語に見られる移動などの言語現象が正しく予測できるということを主張した。またXP-EPP言語における空主語も、Distributed Morphologyなどの最新の文法理論により、その分布が正しく予測できることも述べた。

## 学位論文審査結果の要旨

学位審査会は、2000年1月31日、学内審査委員4名・招聘審査委員2名によって行った。審査の結果は以下の通りである。

本論文は、ミニマリスト・プログラムの枠組みを用いて、ロマンス語及びゲルマン語に広く観察される空主語構文とその節構造を、拡大投射理論並びにRelativized X-bar理論の観点から分析し、その帰結を詳細に検討したものであり、当該研究分野の発展に大きく寄与し得る内容と評価できる。

本研究は、空主語構文を持つロマンス諸語を $X^0$ -EPP言語と位置づけ、当該節構造のIP-Specが投射されない言語であると仮定することによって、ロマンス諸語と日本語が同じ言語類型スペースに属するとする興味深い仮説を設定し、その仮説が統語的に立証可能であることを主張するものである。さらに本論文の仮説によりXP-EPP言語であるゲルマン諸語に存在が予測されるexpletive proについては、その分布が素性移動の仮説とDistributed Morphologyの仮説から導き出せることを論証している。

論文の構成については、当該言語データの提示と理論考察が相互に補完するように章及び節構成がよく工夫され、仮説の構築と検証が厳密な手順に従い明示的に行われている。先行研究についても広く諸説を検討し、多様な視点と豊富なデータから自説を展開して、安易な独断や断定をさけるなど、慎重でバランスのとれた研究姿勢が伺われる。論文は英語で書かれており、海外の研究者等も視野に入れた最前線の研究となっている。

以上の積極的な評価が審査の基本であったが、次のような問題点の指摘もあった。

ミニマリスト・プログラムにおけるRelativised X-bar理論の位置付けを明確にする必要があること。多様な言語データを扱っている点は高く評価できるが、同時に自説の立証に有利な言語データの提示に傾きがちな弊害のあることも自覚した研究であることが望ましい。日本語がIP-Specを投射しない言語であるという仮説と日本語が空主語言語であるという仮説は本来異なる内容をもっているのに、本論文ではその区別が必ずしも明確には用いられていないこと。ドイツ語のexpletive proの分布の実態は本論文で扱っているデータより複雑であり再考の必要のあること。

その他、内容の細部等についても各審査委員の間で種々論議がなされたが、上記問題点を含め、指摘された点の多くは本論文の欠陥というより今後の更なる研究発展への期待といった趣旨のものであり、本論文の研究成果に対する肯定的評価の変更を必要とするものではないことを改めて確認した。

審査委員会は、以上により、本論文を博士の学位論文として認定することにつき、全員一致で合意した。